2011年7月7日

書籍のご提案
『自由報道協会が見た東日本大震災
フリージャーナリストは、何をとらえ、どう報じたか？（仮題）』

自由報道協会（設立準備会）
書籍担当　島田健弘・渡部真

――【概要】――

著者：自由報道協会24人
構成：自由報道協会（担当：渡部真、島田健弘）
発売日：９月１１日（震災から半年を予定）　　初版：5000部（予定）
仮構成：4C＋1C・256P（予定）　A5版(要相談)・ソフトカバー　　1500円～1700円＋税（予定）
印税：「東日本復興支援プロジェクト(仮)」に組み入れ、今後の活動に役立てる
※「東日本復興支援プロジェクト(仮)」については別紙参照

――【企画主旨】――

東日本大震災当初から、私たち自由報道協会のメンバーは独自の取材活動を通して大手では報道できないこと、知りえないことを多く報じてきました。

それらはプルトニウム漏れの事実や原発政策の問題点、放射能の危険性といった原発の問題だけでなく、被災地の衛生問題、略奪・盗難といった事件性のあるものから家族を亡くしても力を振り絞っている人たちの悲しみ、大手メディアではタブー視されるような被災地の混乱などネガティブな情報にまでおよびます。

これら自由報道協会の会員が追った「それぞれの震災」は、時代の証言としても貴重なものであると思っております。それらをまとめることで多角的な「東日本大震災」の資料となるものと思い、ここに単行本企画として提案いたします。

また、本企画は自由報道協会として初の著作物にもなるため、会員にも積極的な販促活動を促します。当会会員のツイッターの合計フォロワー数約84万人（上杉約23万、津田約18万など）にもおよび、それ以外にもブログ、動画などを利用して情報発信が可能です。

なお、この書籍の出版を「東日本復興支援プロジェクト(仮)」（別紙参照）の活動の第一弾として、印税は今後の活動に役立てていく予定です。

――【各執筆者と構成（案）】――

自由報道協会の会員（現在24人）が執筆。それぞれがこれまでおこなってきた取材活動を通じて感じたこと、知ったことなどを写真とともにまとめます。

［12ページ］（インタビュー）「はじめに　記者クラブメディアが報じない真実をとらえ続けたジャーナリストたち」
上杉隆（ジャーナリスト／自由報道協会暫定代表）

［12ページ］写真ページ
烏賀陽弘道、小川裕夫、渋井哲也、田中龍作、津田大介、渡部真、など

［８ページ］「311直後の被災地取材」
神保哲生（ビデオジャーナリスト）

［８ページ］「ドキュメント　311から１週間　自由報道協会の動き」
畠山理仁（フリーランスライター／自由報道協会暫定幹事長）

［12ページ］「国民を欺いた原発報道あれこれ」
伊田浩之（『週刊金曜日』記者）

［８ページ］「東電・保安院会見　政府と東電は、どんな嘘をついたのか？（未定）」
日隅一雄（弁護士・「News for the People in Japan」編集長）

［８ページ］「既存メディアではできなかった、ソーシャルメディアの役割」（インタビュー）
津田大介（メディアジャーナリスト）

［８ページ］「ネットメディアとテレビの融合／なぜサイマル放送が実現したか」（対談）
七尾功（ニコニコ動画政治部長）　／　亀松太郎（ニコニコニュース編集長）

［各６ページ×15ルポ］被災地ルポ
全　域　「地球１週分走り続けた取材活動」（渋井哲也／フリーランスライター）
岩手県　野田村「大手メディアに見捨てられた村」（烏賀陽弘道／ジャーナリスト）
岩手県　全域「マンモス避難所と教育現場（未定）」（渡部真／フリーランス編集者）
岩手県　全域「農業問題（未定）」（上垣喜寛／「THE JOURNAL」編集部）
宮城県　気仙線「リアス海岸の鉄道は復活できるのか」（小川裕夫／フリーランスライター）
宮城県　石巻「地域の命を救った地域メディア（コミュニティFMと石巻日日新聞）」（渡部真）
宮城県　全域「漁業問題（未定）」（西岡千史／「THE JOURNAL」編集部）
福島県　飯館村「福島原発周辺区域で翻弄された住民と行政」（渋井哲也）
福島県　いわき市「震災以降、被災地の不動産はどう変化しているか」（中澤大樹／経済誌記者）
茨城県　水戸市「石巻に戻れなくなってしまった受験生が見た避難生活」（渡部真）
千葉県　旭町「津波はなぜ関東の小さな村を襲ったのか？（島田健弘／フリーランスライター）
東京都　全域「帰宅難民・停電・買い占め……震災の弱い首都TOKYO」（島田健弘）
長野県　小滝地区「孤立した町を救った隣県のヘリコプター」（渋井哲也）
長野県　青倉地区「被災地として扱われない住民たちのジレンマ」（小川裕夫）
全　域　「被災地の夜の町～酒場や風俗業の変化」（渋井哲也）

［８ページ］「市民メディアと311」
岩上安身（ジャーナリスト）

［８ページ］「世界が見た311」（インタビュー）
重信メイ（国際ジャーナリスト）

［８ページ］「福島原発事故がイタリア国民投票に与えた影響」
田中龍作（ジャーナリスト）

［８ページ］「（未定）」
村上隆保（フリーランスライター）

［８ページ］「（未定）」
　白石草　（「OurPlanet-TV」代表）

［８ページ］「芸人が東電会見に通い続けた理由」
　おしどりマコ（夫婦音曲漫才おしどり／吉本興業所属）

［８ページ］「ポスト震災ジャーナリズム」
　上出義樹（ジャーナリスト）

［８ページ］「311以降の日本人のアイデンティティ」（インタビュー）
　東浩紀　（哲学者）

［８ページ］「おわりに」（インタビュー）
　江川紹子（ジャーナリスト）

［各２ページ×３本］コラム「インターンが見た自由報道協会」
　竹口うらら（上智大学学生）　寺家将太（早稲田大学学生）　二村晃弘（東京大学学生）

以上、よろしくご検討ください。

自由報道協会　東日本復興支援プロジェクト(仮)

第一弾
被災地アーカイブ化計画案

（概要）

東日本大震災は大きなショックを我々にあたえた。大地震後の津波では、テレビをとおして街ごと流されていく映像が幾度となくながされ、津波の恐ろしさを目の当たりにした。街そのものが消滅するという異常な事態に対して、復旧のために多くのボランティアが参加しているが、いまだガレキの撤去を含め、遅々として進まない状況だ。

この未曾有の震災の中で、メディアとしてなにができるだろうか？

自慢ではないが、体力に自信のある者も少なく、重機を操れるなどのスキルもない我々にとって、被災地で復旧活動をしても足手まといになるだけではないかという思いもある。

我々メディアにとってやるべきことは、これまでの仕事で培った「聴く」「記録する」という能力を集約させることではないだろうか。

街ごと流された中には図書館や資料館もはいっている。郷土の歴史さえも津波にさらわれ、個人の歴史資料も消失した。

その郷土の「記憶」をできるだけ再現するということは、できないだろうか？

そこで被災者に取材し、街を歩き、郷土の稗史をまとめ、被災地の歴史、個人の歴史、証言、足跡を残す「被災地アーカイブ」という計画を提案する。

（公開方法）

アーカイブは電子書籍、ネット、紙ベースなどさまざまなメディアでまとめ、誰もが閲覧できるようなものにし、さらには被災地の方々が目にできるような仕組みを考え、校正に災害の恐怖と災害に負けない人の営みというものを残していきたいと考える。

（予算・期限）

この制作予算に単行本企画の印税収入をあてるほか、電子書籍の有料化、寄付などで対応する。
今後３年かけて各地に赴き、取材をし、ネット上で簡易版の先行公開し、３ヵ月に一回のペースで電子書籍を発行する。

（担当・島田健弘）